

フォークソングにおける神話の要素

大槻 直子*

Folk Songs and Mythical Elements

Naoko Otsuki*

According to the general understanding of myth, Greek myths are simple well known stories. However, a general definition of the term holds that myths are stories about the life of a people and the origins of natural phenomena, or an event made by supernatural beings. In this paper, using Claude Lévi-Strauss's original notion of the mytheme, I examine how such mythemes function in the field of folk songs. I begin paper with an explanation of the mytheme, tracing how Lévi-Strauss was influenced by Structuralist philosopher Roman Jakobson, and how he utilized mytheme in his study of myth. The concept of the mytheme enabled him to demonstrate his view of mythical commonality. The mytheme notion also enabled him to find similarities between myth and orchestral scores. To understand the meaning of any given part, he argued, we have to see the whole of the work, rather than just a particular line. With these ideas in mind, I examine several folk songs of Bob Dylan, and in the end discover many mythical elements that correspond to Lévi-Strauss's theories. Dylan's lyrics contain within them a kind of mytheme. For example, in his "Blowing in the Wind" (1965) there is mention of both "man" and "wind"— the one a human subject and the other a natural phenomenon, each with its own mytheme. "A man" can walk and stop freely, but "the wind" can only keep on blowing. This opposition leads us to another meaning implicit in his lyrics. And such a function is the main topic in this paper, namely, that mythemes enable a secondary (and arguably deeper) meaning to emerge out of the literally meaning. I conclude my paper with the hypothesis that folk songs themselves are a kind of myth that contain within their lyrics numerous instances of mythemes.

1. はじめに

神話といえば、我々にとってギリシア神話が最も慣れ親しんでいる神話と言えるのだが、広辞苑の神話の定義は次の通りである。「現実の生活とそれを取りまく世界の事物の起源や存在論的な意味を象徴的に説く説話」、「神をはじめとする超自然的存在や文化英雄による原初の創造的な出来事・行為によって展開され、社会の価値・規範とそれとの葛藤を主題とする」ものを神話という。つまり、ギリシア人によって語られたもののみが神話というわけではない。

これを踏まえた上で本稿では、現代においても神

話と呼ぶべきものがあるかどうか検討し、神話と類似する形態を持つ民間伝承からフォークソング（民謡）を取り上げ、神話と共通するものを見出し、音楽の中において神話が我々に何をどのように語りかけているのかを考察する。

2. 神話素について

文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロース（1908－2009）は、自身が研究していた神話¹において、構造主義的アプローチを用いた²。神話の起源を考察することで、そもそも神話とは、実は様々な要素の寄せ集めであること、つまりどの神話にも

* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2010年9月15日 受理

似たような人物ないしは動物が登場したり、または因果関係が逆転していることを指摘し、その事象を構造言語学における音素を応用して「神話素」と呼んだ。そうすることで、内容を理解するには難しい神話であっても神話素という不変の要素を求め、事象を分解していくことで内容理解を助けることができる。これにより、文字を必要としない文化をもつ人々の思考を彼らが伝承してきた神話を通して理解しやすくしている。

ここで、レヴィ＝ストロースが神話をテーマとして講演したラジオ放送をまとめた「神話と意味」において語られた神話を引用して説明していきたい。カナダ西部に伝わる、南風の威力をおさえたガンギエイの神話である。

「人類以前、つまり、動物と人間とがはっきり区別されておらず、半人間・半動物であった時代の物語です。皆が風に困りはてていました。というのは風が——とくに意地の悪い風がしじゅう吹きつづけるので、魚を獲りに出たり、海岸で貝を集めたりすることができなかつたのです。そこで風と戦って、もっと行儀よくさせることに決めました。人間的動物というのか、動物的人間というのか、その何人かが参加して遠征が行われました。ガンギエイも加わって、南風を捕らえるのに重要な役割をはたしました。南風は、いつも吹き続けることはしない、ほんのときどき、またはある時期にだけ吹くことにすると約束をして、やっとな解放してもらいました。このときから南風は、一年のある時期にのみ、または二日に一日だけ吹くようになりました。そして人間は、それ以外のときは魚や貝をとる仕事をするのできるのです。」

レヴィ＝ストロースは、この物語が実際に起こったことではないこと、そしてこれはまったく意味のない話などではないことを注意している。注目すべきなのは、なぜ南風やガンギエイが登場しなくてはいけないのかということなのである。

そこで彼は、ガンギエイの要素について考察する。ガンギエイは、「それを上か下からみるとずいぶん大きいのに横から見ると非常に薄い」（「神話と意味」29）という二項性に彼は目を向けた。一見その大きさは敵の攻撃が当たりやすいのだけれども、一方で薄さがあるからこそ戦いにおいて有利になる。「ある面から見るか他の面から見るかによって」

（30）、つまり、この神話では南風との戦いでガンギエイは有利か不利かという問題に対して「一方は肯定、他方は否定という不連続の二状態」（30）をあらわしているとレヴィ＝ストロースは説明している。

さらに彼はこう続けている。実際に魚が風と戦えるはずがないのであるが、我々はイメージとしてガンギエイの持つ相反するような特徴、大きくて薄いという二項性からものの見方（今回は南風が吹くことについて）を理解することができると。ガンギエイが南風に勝つことができた理由を、大きな体で相手を翻弄し、なおかつ薄い体のため攻撃が当たらなかったからと考えることができる。そして、南風を二項性で考えるとすれば、それは、風が吹くか吹かないかのどちらかであり、人々が生活するためには風が吹かない日も必要であり（漁をするため）、自然界において風が吹く、もしくは吹かない理由をこのような風との戦いに勝利したガンギエイを用いて人々に説明をしているのである。そこには科学的根拠がないにせよ、風が吹くか吹かないか、yes か no かという二項操作が働いている。このようなガンギエイという神話の登場人物、動物を考察することで、文字をもたない文化の思考を理解することができる。

ここでもうひとつ、神話素はある二つの神話に共通して登場する人物たちの因果関係が逆転しているが、そしてまた時間的順序も関係がないという例を引用する³。

「近親同士、あるいはしきたりによって禁じられた仲である恋人が、死によって初めて結びつき、死後ひとつの体になるという物語は、私たちの伝承文学でも親しまれており容易に受け入れられる物語です。・・・ところが、祖母が生まれたばかりの兄妹をくっつけて、一人の子供にしてしまうという別の物語には、私たちは奇異の感を抱かずにはいられません。この物語では子供が成長し、やがてある日、頭の真上に矢を放つと、落ちた矢が体の真ん中を貫いて兄と妹を切り離し、二人はたちまち近親でありながら恋人同士となります。この物語は、不条理で整合性を欠くもののように見えます。ところがこの物語は北アメリカのインディアンのもので、第一の物語と隣接して語り伝えられており、これがまさしく第一の物語を正確に模倣したものであることは、

挿話のひとつひとつを比較対照するだけでだちに明らかになります。すなわち、これは第一の物語を逆に辿った物語なのです。・・・こうした分析によって最初二つの異なった神話と思われたものが、じつはひとつの神話だったということが明らかになります。・・・神話の意味は、他から切り離された個々の神話のなかにあるのではなく、互いの関係の中で初めて明らかになるのです」

引用箇所最後にあったとおり、神話は個々で成立するのではなく、それぞれの物語の中にある神話素を見出すことで相互の物語の意味を補完し合っている。つまり、引用に登場した恋人が死後にむすびつく、二人の兄妹をくっつけて一つにして再び二つに分けるという、一つなるまでの過程の差があるけれども、その事象が神話素となっていることをレヴィ＝ストロースは述べているのである。

こうして、一つの事象に注目して神話をとらえると、別の神話にあった事象のつながりを見出すことがあり、そのつながりを構成している神話素は、神話と神話の関連性を説明し、意味を理解する上で重要な役割を果たしている。

3. 神話素と音楽

また、レヴィ＝ストロースは、この神話素による分析を音楽の分野へと広げている。神話を理解するには、物語を追っていくだけではなく、先のように神話素を見出し、物語の全体を把握する必要があると彼は述べている。そしてこの過程がオーケストラの総譜、スコアに類似していると指摘している。楽譜の1ページにある様々な楽器のパートそれぞれを見なくては曲の全体を把握することができない。そして、さらに彼は音楽の形式のひとつであるフーガを使って類似性を説明している⁴。それは、神話があり意識されなかった17世紀ごろから発展した音楽の形式である。「逃げる」という意味のラテン語に由来するフーガは遁走曲とも呼ばれ、主題の後にその主題に呼応すべく続くものがある。レヴィ＝ストロースはこれを「二人の人物ないし二群の人物が登場するような神話の進み方」に似ていると善悪の対立を例に挙げて説明している⁵。そして最終的には、まず神話においては、対立するものが統合して解決され、一方の音楽においては和音が混ざり合

って曲をしめくくると指摘し、つまり、神話にせよ音楽にせよ、いずれも最終的には統合という形による解決を目指すところが共通していると述べている。

そしてレヴィ＝ストロースは、音楽を音素としてとらえ、言語的アプローチを試みた。言語では「音素が組合わせられて“語”になり、さらに語が組合わせられて“文”になる」一方で、音楽には音素に対応する音はあるのだが、「“語”に相当するもの」がなく、「基本的素材である音を組み合わせると、いきなり言語の“文”にあたるもの、フレーズ」になる⁶ことを述べている。そして、次に神話でもこの構造を見出して音楽と言語との関連性を指摘している。神話には「音素がなく、語があり、文がある」ことから言語の音素、語、文の基本構造に音楽と神話は類似するところがあり、それらは言語から派生したものであることを主張している。

このような彼のアプローチから音楽と神話、神話素の共通点を発見することが可能になる。

4. フォークソングが持つ神話的要素

2章と3章でふれてきた神話の構造や音楽とのアプローチを用いて本章では、それを応用して現代の神話とも言えるフォークロアについて焦点をあてていきたい。神話とフォークロアに関する事典によれば、“In the non-revealed, non-dogmatic religions of the semicivilized and of classical antiquity the folklore materials referred to usually take the form of myths. A myth (from Greek mythos, word, speech) is an explanatory or etiological (from Greek aitia, cause) tale trying to account for all sorts of phenomena (now explained by modern science), and, since the agents held responsible for these phenomena are believed to be certain Powers (gods or demons), connected with these Powers.”⁷と説明があり、フォークロアと神話の共通性を見出すことができる。これが可能であるならば、現代のフォークロアと言うべきフォークソング（無文字文化ではないのはもちろんであるが）、本稿ではボブ・ディラン（1941－ ）の音楽においてもそれが証明できるのが考察していきたい。

ボブ・ディランのデビュー初期にリリースされた“Blowin’ in the Wind”(1962)から分析していく。神話

素から把握していくと、まず、男性 (man) が何度か登場する。そして、鳩 (dove) と砲弾 (cannonball) の二つはいずれも宙を舞うことができ、そしてそれぞれが平和と戦争を想起させ、山 (mountain) と海 (sea) はここでは大まかに言うと相反する自然という二項対立をあらわしている。

先の男性に対応するようなものを見出すのは困難であるが、強いて言うならば、第1スタンザの「立派な男と呼ばれるまでどれだけ歩いて行けばいいのだろう」という問いかけから始まり、そのスタンザの最後に「答えは風に吹かれている」という風 (wind) が対応するのであろう。前章から見てきたように男性と風が対応するのは想像しがたいが、神話素で分析すると、男性はある地点に留まることもできるし、また移動することもできるが、一方の風は留まることができないが、その吹き荒れる風は何かを運ぶ役割を担う。この対立が何を象徴しているのか、これで少しずつ理解できるのではないだろうか。答えを探し歩く男性と答えを所有しながら吹き続ける風。音楽によって導かれたものではないけれども、フーガのような遁走をイメージさせている。

次に、フォークソングというよりもフォークロックと呼ばれている“Like a Rolling Stone”(1965)を取り上げる。この曲に登場するあなた (you) は女性である。かつては羽振りの良い暮らしをしていたけれども、今は「家なしで、誰にも知られないような、転がる石のような」暮らしをしている。この女性からは二つのイメージ、二項性が見受けられる。ひとつは不自由のない生活をしていた過去、もうひとつはその日暮らしの現在である。そして、この女性は曲のタイトルにもある「転がる石」とそのイメージを重ねることができる。石は固くて自ら動くことができず、何かのきっかけで転がりだしたらこれもまた自ら止まることができない。かつては固い石のように安定していた女性の暮らしも転がり始めると、自分の意思で止まることができず、転がり続けている。そんな状況をディランは「どんなふうに感じるの?」と問いかけている。あまりに直接的すぎる問いかけであり、かえってそれは女性に対して同情の念が込められていたり、教戒めいたフレーズとなっている。かつての女性の暮らしぶりを語り、その後で彼女の「転がる石のような」暮らしについてたずねるこのやりとりは最終的にはフェードアウトし、

解決されていない。答えは言わずとも分かっているだろうというディランの意思が見受けられる。

このようにフォークソングを神話の分析方法を用いることで歌詞の中に込められた意味の理解を深めることができる。

5. まとめ

以上のことから、神話を理解する上でレヴィ＝ストロースが提唱していた神話素による分析は、現代の神話とも言うべき民間伝承の一つであるフォークソングの内容理解の一つとして有効な手段であることがわかる。そしてまた、神話分析ができることはすなわち、フォークソングにも神話となりえる要素の可能性を主張することができ、ギリシア神話のようなものが語られた時代以降も同じような方法で語り継がれている事象があると言える。神話と呼ばれるものに用いられている言葉であれ、フォークミュージックの歌詞にある言葉であれ、いずれもその言葉一つ一つが多くの意味を含んでおり、様々なことを聞き手に連想させるのである。

注

- 1 本稿における神話とは、民族が所有する伝承のことを示す。
- 2 レヴィ＝ストロースは、言語学者ロマーン・ヤコブソンから構造言語学を教わっている。
- 3 クロード・レヴィ＝ストロース著、川田順造・渡辺公三訳『レヴィ＝ストロース講義』平凡社 2005 pp.119-120
- 4 レヴィ＝ストロースは音楽の形式全てが必ずしも神話の把握の仕方と類似しているわけではないと注意している。
- 5 クロード・レヴィ＝ストロース著、大橋保夫訳『神話と意味』みすず書房 1996 p.70
- 6 『神話と意味』p.72-3
- 7 *Dictionary of folklore Mythology and Legend*. Ed. Maria Leach. Funk and Wagnalls Company, 1949.

参考文献

- 1) Dylan, Bob. *Lyrics 1962-2001*. Simon and Schuster, 2004.